

幼児期の発達障害をめぐって

平岩 幹男

Rabbit Developmental Research

【はじめに】幼児期には、言語発達の遅れがある場合を除いて、まず発達障害の診断ができるかどうかという問題があり、行動やコミュニケーションの困難を抱えて幼稚園や保育園に通っている子どもたちも少なからずいると考えられる。

【自閉症スペクトラム障害】言語発達の遅れをきっかけとして発見されることが多い自閉症スペクトラム障害は、わが国では言葉の遅れ＝知的な遅れとみなされて集団での生活訓練をすることが一般的であるが、国際的には早期からの個別にプログラムを作成してのトレーニングが有効であることが明らかになってきつつあり、それによって発達予後が大きく改善する場合もある。トレーニングには様々な方法があるが、その代表は応用行動分析（ABA）であり、ABAの中にもいくつかの方法がある。多くの療育機関では個別の発達評価（発達指数や知能指数など）は行うものの、個別に計画して個別にトレーニングを展開することはまだまだ一般的とは言えない。しかし個別のトレーニングによって大きく伸びている子どもたちは演者の外来でも相当数見られている。

【行動の原理】望ましい行動を増やし、望ましくない行動を減らすことを目指すためには、まず行動がどのようにして起きているかを考える必要がある。行動はその原因、行動そのもの、行動の結果に分けることができ、通常は行動の結果によって判断されることが多いが、望ましい行動を増やすためには行動の原因を考えて対応することも重要である。

【ほめる、叱る】望ましい行動はほめることが強化につながるが、ほめることは子どもの注意が別の方に向けられる前に、瞬時に行わないと効力は低下する。またほめるときには子どもと「喜び」の感情を共有することも目的の一つとなる。叱ることはその対象の行動はすでに起きてしまったことなので、感情的に怒ってみても行動の変容にはつながりにくい。次にその行動が起きる可能性を低くすることが目的なので、不適切行動を叱ることよりも、実は不適切行動を「がまん」したらほめられることを子どもたちが学習することが、行動変容につながる。

【困りごとへのトレーニング】発達障害の診断ベースではなく、何にどこで困っているかを考えて必要なトレーニングを行うことが、園での行動やコミュニケーションの課題を抱える子どもたちへの対応の面では基本であると考えている。